

日本語教育における効果的なカタカナ語指導のための基礎研究
A Study of Loanword Usage in Japanese to Develop Effective Teaching Methods

小木曾左枝子, 立命館大学
阿久津純恵, 東洋大学
Saeko Ogiso, Ritsumeikan University
Sumie Akutsu, Toyo University

1. はじめに

グローバル化や社会の変化にともない、カタカナ語が急増する中、日本語学習者へのカタカナ語指導が不十分なことが指摘されている。日本語教育においては、入門期のカタカナ文字指導後、カタカナ語学習に焦点が当てられることはほとんどなく、カタカナ語が苦手だという学習者が中上級レベルになっても多い。この問題は、文字習得が重視され、語彙習得があまり注目されない日本語教育の傾向に起因するとも言える。

現代日本語では、英語を語源とするカタカナ外来語が大多数を占めている。国籍に関わらず英語の知識がある日本語学習者が多い昨今、なぜカタカナ語を難しいと感じる学習者が多いのだろうか。本稿では、体系的なカタカナ語指導を検討する第一歩として、日本語教育におけるカタカナ語学習・指導の課題を考察し、日本語母語話者の英語語彙習得におけるカタカナ外来語活用の研究結果を鑑み、英語教育からの示唆を日本語教育におけるカタカナ語指導にどう取り入れることができるかを一考する。

「カタカナ語」の定義であるが、本稿では「カタカナ語で表記される語」（阿久津 2015: 21）とする。また、「カタカナ語」には、擬声語・擬態語などの「非外来語のカタカナ表記」が含まれるため、「漢語以外の借用語」（中山 2015: 107）として定義される「外来語」および「日本人による独自の造語」（陳 2011: 124）と定義される和製英語を含む「和製外来語」を、「カタカナ外来語」と呼ぶこととする。ただし、先行研究においては、「カタカナ語」、「カタカナ外来語」、「外来語」など、その文献で使用されている用語で示すこととする。

1.1 日本語総合教科書におけるカタカナ語学習の課題

一般的に初級から中級の段階では、総合教科書を中心に学習を進めていくことが多い。しかし、カタカナ語学習について言えば、総合教科書では、現実社会でのカタカナ語使用への対応が難しいことが問題である。現代日本語において、カタカナ語の増加が著しいにもかかわらず、学習者が教科書でカタカナ語に触れる機会が少なく、またカタカナ語を体系的に学習していく方策も示されない状況である。

日本語における外来語の量的変化を探る大規模な調査は近年行われていないようであるが、国立国語研究所（2005）が発表した『現代雑誌の語彙調査』の結果は、1994年の段階で雑誌70誌における外来語の比率が延べ語数で12.4パーセント、異なり語数で34.8パーセントであった。この調査の実施年から30年ほど経過している現在、外来語がさらに増加していることは容易に想像できる。国語辞

典における外来語の語数をみても、1891年発行の『言海』では外来語の割合が1.4パーセントだったのに対し、2011年発行の『新選国語辞典』では9パーセント（茂木 2019）となっている。また、高頻度・広範囲で使用される語群とされる「基本語彙」へ外来語が進出している（望月 2012、金 2012a、金 2012b）ことも指摘されている。

日本語教育でも、このような外来語の増加や使用の変化を踏まえた上で、日本語の語彙としてカタカナ語をどのように指導していくかを考えることが望まれる。出版年度が新しい教科書では、時代の流れに沿ったカタカナ語使用が考慮されている傾向はあるが、教科書索引におけるカタカナ語の比率は、表1からわかるように、決して高いとは言えない。

表1 索引における教科書別カタカナ語の割合
(小木曾 2022a: 99、小木曾・柏木 2022)

教科書名		総語数	カタカナ語	
			語数	割合
初級	『初級日本語 げんき I』第3版 (2020年発行) 『初級日本語 げんき II』第3版 (2020年発行)	1,774	191	10.8%
	『みんなの日本語 初級 I』第2版 (2012年発行) 『みんなの日本語 初級 II』第2版 (2013年発行)	1,980	185	9.2%
	『初級日本語とびら I』 (2021年発行) 『初級日本語とびら II』 (2022年発行)	1,485	114	7.7%
中級	『中級日本語 カルテット I』 (2019年発行) 『中級日本語 カルテット II』 (2020年発行)	1,537	95	6.2%
	『みんなの日本語 中級 I』 (2008年発行) 『みんなの日本語 中級 II』 (2012年発行)	3,340	364	10.9%
	『上級へのとびら』 (2009年発行)	1,511	99	6.4%
	『中級の日本語』改訂版 (2008年発行)	1,658	107	6.5%

前述の『現代雑誌の語彙調査』が示す34.8パーセントという雑誌70誌における外来語の比率（異なり語数）と比べると、教科書におけるカタカナ語の割合は低く、教科書と現実のカタカナ語使用の間に開きがあることがうかがえる。

さらに、課題として考えなければならないのは、教科書の索引に掲載されているカタカナ語と本文に出現するカタカナ語が必ずしも一致するわけではないことである。初級の教科書においては、人名・地名・機関名などの固有名詞のカタカナ語を除けば、教科書に出現するカタカナ語のほぼ全てが索引や単語リストに掲載されている傾向がある。しかし、中級になると、初級で学習したカタカナ語以外でも、索引や単語リスト不掲載のカタカナ語が本文に出現することが多々ある。よって、表1の索引からみたカタカナ語の割合がその教科書における実際のカタカナ語出現率だとは言えない。例えば、『みんなの日本語』は、初級でも中級でも本文に出現するカタカナ語が全て索引に掲載されているため、他の教科書と比べてカタカナ語の割合が高く示されているが、実際には他の教科書のほうが本文

で出現するカタカナ語の数は多い。表2は、中級教科書の『カルテット』の本文に出現するカタカナ語を分析した結果をまとめたものであるが、表1の索引におけるカタカナ語の割合と開きがあることがわかる。

表2 『中級日本語カルテット』本文におけるカタカナ語の分析
(小木曾・柏木 2022)

カタカナ語 延べ語数	3,668 語
カタカナ語 異なり語数	672 語
初級既習カタカナ語 (例: 『げんき』)	114 語
索引掲載の対訳付きカタカナ語	95 語
索引以外での対訳付きカタカナ語	23 語
未習語対訳なしのカタカナ語	440 語 (66%)

また、初級の教科書で学習したとは考えにくい未習カタカナ語の中には、単語リストや索引不掲載で、対訳が載っていないカタカナ語も多く見られる。訳語がない新出カタカナ語については、英語などの知識を用い意味推測が可能だと思われる語も多いが、その推測ストラテジーが初級の段階で身につけているかは疑問である。

1.2 日本語学習者に対するカタカナ語指導の課題

どのようにカタカナ語指導を行なっていくかを考える際、教師が日々の授業の中でできることの一つとして挙げられるのは、教科書に出てくるカタカナ語を例に、学習者が実生活でカタカナ語に対応できるように指導していくことである。しかし、1.1 でみたように、総合教科書を使用しながらカタカナ語を学習するのは、量的に限られており、また必ずしも教科書に對訳があるわけではないため、指導の観点からは、学習者に推測ストラテジーを身につけさせることも求められる。また、教師は、日本語におけるカタカナ語の特徴、そして学習者が直面するカタカナ語を学習する上での困難点を把握し、指導していくことも必要である。

望月 (2012) は、日本語学習者がカタカナ語を学ぶ際に感じる難しさの要因を9つに分類している。表3は、望月の「カタカナ外来語の学習上の困難点再考」(2012: 8-10) を要約したものである。

表3 「カタカナ外来語の学習上の困難点再考」 (望月 2012: 8-10)

①	発音のズレ	外国語をカタカナ語化するには、日本語の音韻体系に従って変える必要があるが、その際にCVパターン(開音節)になることが多い。日本語には母音が5つしかないため、外国語の多くの母音が5つに収斂される。子音については、さらに複雑さが増す。
②	表記のゆれ	表記の原則と慣用表記の間にゆれがあり、2種類の表記ができる。
③	意味のズレ	和製英語や外来語にみられる現象で、外来語は限定された意味範囲で使われることが多いため、意味の拡大や縮小がみられたり、原語

		にはない派生的な意味で用いられたりする。そのため、意味の推測が難しい。
④	和製英語	和製英語か、英語由来の外来語か、まだ外来語化していない英語なのかの区別が難しい語がある。
⑤	縮約語または短縮語	長い単語や複合語が短縮される日本語の傾向がカタカナ外来語にも適用されるため、原語や意味の推測が難しい。
⑥	混種語	「和語＋外来語」あるいは「外来語＋和語」といった異なる語種で構成される語がある。
⑦	動詞化・ナ形容詞化	外来語は名詞の形で借用されることが多いが、「する」や「る」を付けて動詞化されたり、「な」を付けて形容詞化されたりする。
⑧	非外来語のカタカナ表記	通常、カタカナ表記されるもの以外にも、日常的に擬音語・擬態語、外国製日本語、感動詞、ふりがな、機関・施設名などの表記に使われたり、難しい漢字の名詞などにも使われたりする。
⑨	和語・漢語・外来語の類語	基本語化した外来語と既存語の使い分けが明確ではない語がある。共起語との関連性など、情報が辞書に掲載されていない。

上記の①～⑧については、多くの研究者が既に指摘しているカタカナ外来語の困難点だと、望月は述べている。しかし、⑨については、カタカナ外来語の中に日本語の「語彙の中心部に移行して「基本語化」」（望月 2012: 2）している語もあり、それゆえ、従来の和語・漢語との意味の重なりが生じ、学習者が難しさを感じる一つの要因となっているとして、カタカナ外来語の困難点に含めるべきだとしている。

この望月の「カタカナ外来語の学習上の困難点再考」をもとに、教科書に出現するカタカナ語の困難点を学習段階別に分析したところ、初級では①～⑤の困難点を、中級以降では①～⑨の全ての困難点を考え、指導していく必要があることが見受けられた（小木曾 2022b）。初級の段階で、まず考慮しなければならない困難点は、「発音のズレ」や「意味のズレ」だと言える。外国語が日本語に借用されてカタカナ外来語化する際、日本語の音韻体系に従って変化するということを、教師は学習者に意識させることが重要となる。また、語の意味がわからない時には、単に辞書などで調べるといった「辞書ストラテジー」だけでなく、原語と日本語の相違点を考慮に入れた上で類推する「推測ストラテジー」を学習者が身につけられるように指導していく必要もある。

中級になると、教科書にもよるが、学習者はカタカナ語学習において、表3の①～⑨全てにわたり、様々な困難に遭遇することが予測される。教科書に出現するカタカナ語を例に挙げながら、学習者がカタカナ語を理解するために必要な知識を示し指導すると同時に、実生活で学習者がカタカナ語に対応できるスキルを身につけられるよう導くことが重要となってくる。

2. カタカナ外来語学習における英語教育からの示唆

日本語教育では、「語彙は一般的に他の技能と併せて指導されることが多く、単独で体系的に指導されることはない」（横須賀 1999: 112）と指摘されており、カタカナ語に限らず、語彙指導に焦点が当てられることが少ない。それは、日本語教育においては、語彙は「授業で教えるよりも、家で覚えてくる項目として扱

われる」ことが多く、教師が「語彙より文法や会話に授業時間を使ったほうがいい」（畑佐 2022: 75）と考える傾向が要因だと推察される。

第二言語習得の分野においても、1980年代初頭までは、語彙習得に関する研究はほとんど行われておらず、そのことは Paul Meara の論文“Vocabulary acquisition: A neglected aspect of language learning”（1980）でも指摘されている。この Meara の論文タイトルにあるように、語彙習得は「軽視されている側面（neglected aspect）」（中田 2019: iv）であったが、1980年代以降、多くの研究者の関心を集めるようになり、第二言語習得の分野において、様々な観点から語彙習得の研究が進められるようになった。日本語で書かれた英語教育学の専門書では、文法習得に大半のページが割かれ、語彙習得はあまり重視されていない（中田 2019）という指摘もあるが、日本語教育と比べれば、日本語母語話者を対象とした英語語彙習得に関する研究は数多く行われている。

本稿では、英語語彙学習におけるカタカナ外来語活用の有効性を先行研究から考察すると同時に、本稿の筆者が共同研究者と行った、英語を学習する日本人大学生を対象としたカタカナ外来語意識調査（Akutsu & Katase 2022）の結果を鑑み、日本語教育におけるカタカナ外来語学習・指導への示唆としたい。

2.1 英語語彙学習におけるカタカナ外来語活用の有効性

第二言語語彙習得分野の研究において、カタカナ外来語と関連して示唆に富んでいると言える点は、語彙学習における同根語の促進効果である。Nation（1994: 50）が“cognates makes the learning of vocabulary much easier”と述べているように、他の言語から借用された語には、原語との発音や意味における類似点があり、語彙学習に対する有効性が認められている。日本語における外来語は、主に西洋言語から借用された語で、江戸時代にはオランダ語やポルトガル語から借用された語、江戸時代末期からはフランス語、ドイツ語、イタリア語由来の語が多かった（畑佐 2022）。しかし、現代の日本語では、英語由来の外来語がその大多数を占めており、『岩波国語辞典』（第3版）収録の外来語で見ると、掲載外来語の約80パーセントが英語起源である（須部 2013）。英語由来のカタカナ外来語が増加する現代社会において、英語教育では、カタカナ外来語の知識を活用し英単語学習を向上させるという促進効果に目が向けられている。

また、英語の高頻度語にカタカナ外来語が多い（Daulton 2008）ことも英語語彙学習におけるカタカナ外来語活用に有効な要素だと言える。例えば、語彙頻度1000語レベルで見ると、総語数は803語（約80%）、ワードファミリー数は548語（約55%）がカタカナ外来語で、総語数でもワードファミリー数でも、カタカナ外来語の占める割合は半数以上となっている。言い換えれば、日本語母語話者の英語学習者は、カタカナ外来語の知識をリソースにして高頻度の英単語を学ぶことができるということである。これを日本語学習者に当てはめて考えると、英語母語話者を含む英語知識がある日本語学習者は、日本語のカタカナ外来語を学習する際、よく使われている身近な英単語の知識を活用できるということである。カタカナ外来語の知識を活用した語彙学習は、入門期に導入すると効果が高い（相澤・磯 2011）ことも報告されている。

さらに、カタカナ外来語は、英単語の定着に有効だという研究結果もある。Rogers 他（2015）の研究では、日本語でカタカナ外来語として存在する英単語 11 語を含む合計 22 語の英単語を日本人大学生に学習させ、学習直後と事後テストを実施し、その結果を比較している。学習直後も 1 週間後のテストも、日本語でカタカナ外来語として使われている英単語は、そうでない英単語よりも正答率が高く、カタカナ外来語として存在する英単語のほうが習得が容易だと結論づけられている。

英単語学習におけるカタカナ外来語の活用については、英語との音韻や意味の相違が学習上の干渉になることも指摘されてはいるが、上述のような利点も多く、その有効性が期待されている。

2.2 英語学習者の意識調査をもとにした英語語彙学習・指導方法の可能性

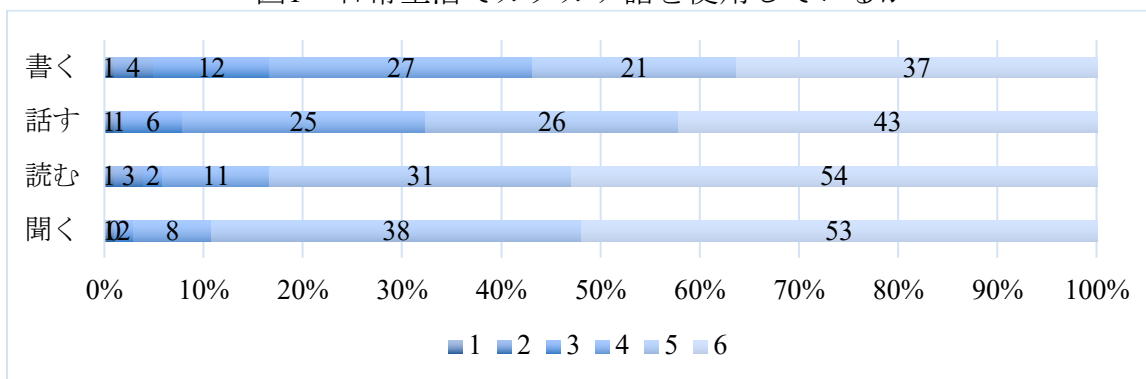
2.1では英語語彙学習におけるカタカナ外来語活用の有効性について述べたが、ここでは、本稿の筆者が行った研究結果（Akutsu & Katase 2022）をもとに、英語教育におけるカタカナ語を活用した語彙学習や指導方法の可能性を、より具体的に考察する。

外国語として英語を学ぶ過程にある日本語を母語とする英語学習者が、英語由来のカタカナ外来語について抱いている意識を考察し、英語教育実践に応用することを目的としたこの調査は、東京の私立大学の1年生および2年生の必修英語科目を受講している102名の学生を対象とし、Googleフォームを利用したWebアンケート形式で2022年に実施されたものである。国立国語研究所の『外来語に関する意識調査 II（全国調査）』（2005）を参考にリッカート尺度と自由記述を組み合わせた調査紙を構成し、日本語母語話者である大学生英語学習者が、日本語における英語由来のカタカナ語使用をどのように捉えているのか、また英語由来のカタカナ語に関する認知度や意識は、英語習熟度とどのような関係性があるかについて考察した。

「日本語におけるカタカナ語に対する意識」と「英語学習におけるカタカナ語使用」に関して、対象者の認知状況を調べるため、6件法（1. 全く当てはまらない、2. 当てはまらない、3. やや当てはまらない、4. やや当てはまる、5. 当てはまる、6. 非常に当てはまる）で回答を求めた。分析の結果、日常生活におけるカタカナ語に対する意識や使用状況と、英語学習時のカタカナ語知識の使用状況や有用性に対する意識の間には相違があることが明らかとなった。

まず、日常生活でカタカナ語を使用しているかという問いに関して、図1の度数分布表からは、聞いたり読んだりする時のほうが、話したり書いたりする時よりもカタカナ語を使用しているという回答結果となった。

図1 日常生活でカタカナ語を使用しているか

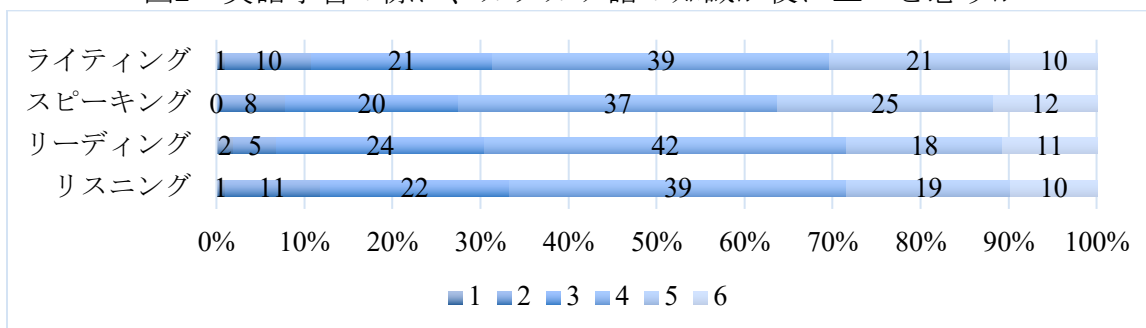


(1. 全く当てはまらない、2. 当てはまらない、3. やや当てはまらない、4. やや当てはまる、5. 当てはまる、6. 非常に当てはまる)

総合的にみると、日本語母語話者がカタカナ語は日常生活において役立っていると捉えている傾向が明らかとなり、全体的な使用・認識傾向は高い。しかしながら、回答の平均値は、聞く5.36 (SD .83)、読む5.25 (SD 1.03) に対し、話す4.99 (SD 1.07)、書く4.70 (SD 1.23) となっており、理解時にカタカナ語をより役立つ知識と捉えている一方で、実際の使用という点においては、より慎重な態度で臨んでいることがわかる。

さらに、英語学習の際に、カタカナ語の知識が役に立つと思うかという問いに関しては、日本語におけるカタカナ語使用と比較し、より一層注意深く使用するものと捉えていることがわかる回答結果となった (図2)。

図2 英語学習の際に、カタカナ語の知識が役に立つと思うか



(1. 全く当てはまらない、2. 当てはまらない、3. やや当てはまらない、4. やや当てはまる、5. 当てはまる、6. 非常に当てはまる)

英語4技能全てにおいて、回答の平均値が下がり、リスニング3.92 (SD 1.14)、リーディング4.00 (SD 1.10)、スピーキング4.13 (SD 1.10)、ライティング3.97 (SD 1.13) という結果となった。図1と比較すると、日本語におけるカタカナ語ほどには、英語学習に役立つという意識を持っていないことが明らかとなり、この点に、カタカナ語を活用した英語学習について、指導方法の検討の余地があると思われる。

また、自由記述の分析から、英語語彙の理解や意味の推測に関して、カタカナ

語の知識が役立つと捉えている学習者が多い一方で、同時に、発音の相違から、英語学習の妨げになると感じていることも明らかとなった。特に、今後の指導の課題として意味・発音・言語意識の3点について、より積極的な指導が必要であることが観察された(表4)。

表4 カタカナ語知識と英語学習に関する自由記述コメントのまとめ

肯定的なコメント	<ul style="list-style-type: none"> ● 英単語の記憶に役立つ ● 英語の単語や文章の意味の推測に役立つ ● 英語の発音の推測に役立つ ● 英語に親しみをもつことができる ● 日本語と英語におけるカタカナ語使用に対して意識が高まる ● 日本語と英語のカタカナ語の意味の違いに興味を持つ
否定的なコメント	<ul style="list-style-type: none"> ● 誤った発音を覚えてしまうリスクがある ● 英単語の意味やニュアンスを誤って学習してしまう ● 英単語としての記憶を妨げる ● 日本語でカタカナ語の意味を説明できなくなってしまう

多くの学習者が、カタカナ語の有用性を認めているが、カタカナ語は必ずしも英語力の向上に直接的に寄与するものではないと客観的に捉えている様子が考察された。学習者コメントの分析結果からも、今後の指導の課題として、特に「意味」、「発音」、「言語意識」の3点について、より積極的なアプローチが必要であることが考察された。語彙学習・指導において、カタカナ語と英語の「意味」における類似点・相違点を確認し、派生語・共起表現を導入しながら適切な語彙使用を導く指導の必要性に加え、カタカナ語と英語の「発音」の相違についても指導が求められていることが明らかとなった。学習者の既知の語彙知識としてカタカナ語を指導に取り入れることで「言語意識」を高める指導により、英語学習へのモチベーションと自信を培う可能性の高まりが期待できる。この調査は、日本語母語話者である大学生の英語学習において、カタカナ語にはどのような有用性があるかを明らかにすること目的としており、英語学習者の言語意識および英語力との関係を明らかにすることを試みたが、学習者の自由記述コメントの分析からも、英語学習者が、日本語の語彙として保有しているカタカナ語知識を、英語教育に活用する可能性が示唆されていると思われる。

3. まとめ

本稿では、日本語教育におけるカタカナ語学習・指導の課題を考察し、英語学習者の語彙学習におけるカタカナ語知識の活用について、日本人大学生を対象に実施されたカタカナ語意識調査の分析結果を中心に、英語教育におけるカタカナ語の有用性や可能性を鑑みた。表4にまとめられている「肯定的なコメント」は、日本語学習者に対するカタカナ外来語指導においても、同様に有用な点として考えられるものである。また、「否定的なコメント」については、日本語教育におけるカタカナ外来語指導でも注意点として考慮する必要がある点だと言える。このように、英語学習者の語彙学習におけるカタカナ語活用の有用性も注意点も、

日本語学習者へのカタカナ外来語学習に当てはめて考えることができるところが多々ある。

英語教育からの示唆を日本語教育にどう取り入れるかという観点から、以下を日本語教育におけるカタカナ語指導の課題として提案したい。

- (1) 英語の高頻度語にカタカナ外来語が多いことを考慮し、入門期において、カタカナ文字指導だけでなく、積極的にカタカナ語指導を行う。日本語の発音指導をする際に、英語がカタカナになる際の「発音のズレ」も考慮しながら、効果的なカタカナ語の指導方法を検討する。
- (2) 英語由来のカタカナ語の習得が容易なこと、長期記憶が期待できるという英語教育の先行研究を踏まえ、日本語学習者の語彙力向上を目指す指導方法を検討する。
- (3) カタカナ外来語の意味変化や意味のズレに関して、英語教育における分析も参考に、より分かりやすいカタカナ外来語の説明を工夫する。教科書の索引や単語リストを確認し、学習者の理解に支障がない訳語どうか精査した上で、補足説明を検討する。
- (4) 近年のカタカナ語増加の傾向を踏まえ、英語教育におけるカタカナ語意識調査の結果なども参考にしながら、日本語学習者に対するアンケート調査を積極的に行い、効果的かつ体系的なカタカナ語の指導方法を検討する。

日本語教育においては、非外来語のカタカナ表記、和語や漢語を外来語の類語とどう区別するかといった問題を別に考えていかなければならないが、上記の点を考え、入門期・初級の段階から体系的なカタカナ語指導をしていくことを考える必要があるのではないだろうか。

参考文献

- 相澤一美・磯達夫（2011）「小学校4年生教科書及び副読本に使用されているカタカナ英語の分析—効果的な教科連携に向けての調査—」『小学校英語教育学会紀要』11, 37-42
- 阿久津智（2015）「借用をめぐる諸相」沖森卓也・阿久津智（編）『ことばの借用』1-32 朝倉書店
- 国立国語研究所（2005）『外来語に関する意識調査Ⅱ（全国調査）』
https://repository.ninjal.ac.jp/record/2320/files/gairaigo_iskts_002.pdf（2022年3月3日）
- 国立国語研究所（2005）『現代雑誌の語彙調査—1994年発行70誌』
https://repository.ninjal.ac.jp/record/1361/files/kkrep_121.pdf（2023年8月14日）
- 小木曾左枝子（2022a）「カタカナ語学習の観点から見た初級・中級教科書の分析」『2022年ブカレスト大学日本語教育シンポジウム発表論集』91-107
https://drive.google.com/file/d/1O-1aTI8eT76A_tRenpdgB0_Mco0tVbmD/view（2023年8月14日）

- 小木曾左枝子 (2022b) 「中級日本語学習者へのカタカナ語の指導」『ポズナン & クラフ日本学専攻科設立 35 周年記念学会』アダム・ミツキェヴィチ大学 / ヤギェロン大学 2022 年 3 月
- 小木曾左枝子・柏木美和子 (2022) 「中級日本語教科書における単語リストの英語対訳の役割：カタカナ語の分析」『第 24 回英国日本語教育学会年次大会』カーディフ大学 2023 年 9 月
- 金愛蘭 (2012a) 「日本語の攻防【語彙】日本語の基本語彙に入り込む外来語」『日本語学』31(3), 78-91
- 金愛蘭 (2012b) 「外来語の基本語化」陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫 (編) 『外来語研究の新展開』第 1 部 29-45 おうふう
- 須部宗生 (2013) 「カタカナ英語と和製英語-最近の傾向を中心として」『環境と経営 静岡産業大学論集』第 19 巻 2 号, 127-137
- 陳力衛 (2011) 「ことばの変遷」沖森卓也・木村義之・田中牧郎・陳力衛・前田直子『図解 日本語の語彙』94-125 三省堂
- 中田達也 (2019) 『英単語学習の科学』研究社
- 中山恵利子 (2015) 「現代日本語における外来語」沖森卓也・阿久津智 (編) 『ことばの借用』第 4 章 106-144 朝倉書店
- 畑佐由紀子 (2022) 『学習者を支援する日本語指導法 I 音声 語彙 読解 聴解』くろしお出版
- 茂木俊伸 (2019) 「外来語の氾濫と定着」田中牧郎 (編) 『現代の語彙-男女平等の時代』第 1 部 3 章 32-42 朝倉書店
- 望月通子 (2012) 「基本語化を考慮したカタカナ外来語の学習と教材開発—その振り返りと新たな開発に向けて」『関西大学外国語学部紀要』6, 1-16
- 横須賀柳子 (1999) 「語彙学習及び漢字学習ストラテジーの研究」宮崎里司・J.V.ネウストプニー (編) 『日本語教育と日本語学習 学習ストラテジー論に向けて』97-116 くろしお出版
- Akutsu, S., & Katase, K. (2022). University Students' Awareness Level of English Loanword Usage: English Writing and Questionnaire-Based Data Analysis, The 61st JACET International Convention, August, 2022.
- Daulton, F. E. (2008). *Japan's Built-in Lexicon of English-based Loanwords*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- IBM Corp. Released 2023. IBM SPSS Statistics for Macintosh, Version 29.0. Armonk, NY: IBM Corp.
- Meara, P. (1980). Vocabulary acquisition: A neglected aspect of language learning. *Language Teaching and Linguistics: Abstract*, 13, 221-246.
- Nation, P. (2014). What do you need to know to learn a foreign language? Retrieved August 14, 2023, from https://www.wgtn.ac.nz/lals/resources/paul-nations-resources/paul-nations-publications/publications/documents/foreign-language_1125.pdf
- Rogers, J., Webb, S., & Nakata, T. (2015). Do the cognancy characteristics of loanwords make them more easily learned than noncognates? *Language Teaching Research*, 19, 9-27.